

中国の転換と中ソ関係

中 嶋 嶺 雄

司 会：伊 東 孝 之

コメンテーター：木 戸 蒔

木 村 汎

〔I〕 報 告 要 旨

〈はじめに——北京の北館とマカオの石卓〉

北京の北館とマカオの石卓——このふたつは、それぞれ中国のロシアおよびアメリカとの最初の出遭いがいかなるものであったか、を象徴している。

まず、「北館」とは、現在北京のソ連大使館が置かれている地域の旧称である。1683年以来、ここは「中国のなかのロシア」であった。清の康熙帝がアルバジン城を包圍攻略したさい、投降したワシーリ—隊長以下45名のコサック兵を北京に護送し、ここに居住させたのがそのはじまりである。以来ここには、白樺並木ができ、放牧地、りんご園がひらかれ、図書館、气象台、酪農工場、神学校、ギリシア正教の教会などが建てられていた。「アルバジン族」は、ここで一種のコミュニオンを形成し、恐らくネルチンスク条約に満足したであろう清によって好遇されながら、満洲娘と結婚して子孫を残し、中国姓を名乗って中国に同化しようと努めた。しかし、やがて苛酷な運命が彼らの子孫を襲うことになる。即ち、義和団事件が勃発すると、一般の中国人から隔離された彼ら「青い眼の中国人」は、真先に攻撃の対象とされ、教会や气象台には火が放たれる一方、虐殺された者が222名にも及んだのである。

他方、マカオの観音堂境内には、今も、1844年に中国がアメリカと結んだ望厦条約の石卓が残されている。この条約は、アヘン戦争直後、南京条約をはじめとする一連の不平等条約と同じ時期に締結されたものである。しかし、当時のアメリカは、開拓を進めてきた西部の先の、太平洋の彼方にのぞむ清末の中国を、新鮮な別世界のように感じていた点で、イギリスなどとは明らかに異なった中国観を持っていた。また中国人の側も、当時アメリカを「中国人にアヘンを売りつけなかった唯一の赤毛」として評価していた。このため、望厦条約は、他の条約に比べ、中国人からの批判を受けることが少なかったのである。

以上のような歴史のひとつコマは、第二次大戦後の中ソ・米中関係を考えるうえで印象深い。歴史的に見て摩擦を起こしがちであった中露（中ソ）が「一枚岩の団結」を誇る一方、その接触の初期にお

いてより好意ある感情で結ばれていた米中が激しく対立することになったからである。

〈1〉 同盟と敵対の相関 — 中ソ対立をどうとらえるか —

さて、本報告の主な目的は、現在の中国および中ソ関係の分析・検討を通じて、今後の中ソ関係の行方を占ってみることである。そのさい、私はここでまず、次の2点を指摘しておきたい。①今日の中ソ対立を、我々は、次のような四つのレベルにおける対立の重層的一体化として把握すること。即ち、(a)民族的対立<<nation-to-nation conflict>>（特にモンゴル民族の居住空間をめぐる対立）、(b)国家的対立<<state-to-state conflict>>（統一的近代国家形成への衝動が双方に生じてからの対立）、(c)イデオロギー的対立<<party-to-party conflict>>（いわゆる「中ソ論争」）、(d)外交上の対立<<government-to-government conflict>>（(c)のレベルでの何らかの変化および米中関係の展開如何により左右される対立）。②しかし、このような根深い重層的対立にもかかわらず、戦後中ソ関係史においては一度ならず関係の改善に向けた「復元力」が働いてきたこと。従って戦後中ソ関係を全体として「同盟と敵対の相関」として総括することができること。この第②点について多少具体的に述べておくと、戦後中ソ関係史は、およそ次のような三つのプロセスを辿りつつ展開されてきたと考えられる。

〔第一のプロセス〕 — 中華人民共和国成立前からスターリンの死まで。この時期には、次のような中ソ対立の要因が存在していた。(a)スターリンの毛沢東不信・中国共産党過少評価に対する中国の反発。(b)ヤルタ秘密協定に見るスターリンの膨脹主義的極東政策に対する中国の反発。(c)毛沢東「人民民主主義独裁について」のなかにおける「向ソ一辺倒宣言」（49年7月）直後の中ソ友好同盟条約（50年2月調印）に対する中国の不满。(d)朝鮮戦争をめぐる中ソの確執。(e)高崗事件をめぐる両国の摩擦。

〔第二のプロセス〕 — 54年秋から58年前半まで。この時期は、〔第一のプロセス〕に対し、スターリンの死を契機とする「友好の時代」となった。

〔第三のプロセス〕 — 58年以降現在に至るまで。この時期の中ソは、百家争鳴運動（57年）から反右派闘争（58年）を経て「大躍進」に向かうなかで形成された毛沢東型社会主義路線に対するソ連の反発、および58年夏の台湾海峡危機などを契機として、再び「対立の時代」に入った。

以上において、私が「復元力」というのは、例えば、両国の次のような動きのことを指す。(a)58年秋のフルシチョフの北京訪問→旅順口からのソ連軍の撤退、新疆における中ソ合併会社の消滅など、従来からの懸案事項に関するソ連側の譲歩→中国の“対ソ平等化”の実現。(b)69年、ホーチミンの葬儀からの帰途、いったんソ連領に入ったコスイギンを中国が北京に呼び戻したこと。(c)76年、毛沢東の死後、ソ連が中国に慎重に対応しようとする姿勢を見せていたこと。

<2> 現代中国の政治過程と変動要因——中国の転換をどう見るか——

次に、ここで中国の建国以来の内政の推移をごく簡単にふり返ってみたい。第一に、それは、ほぼ5年周期で繰り返されてきた「穏歩」と「急進」の循環過程であった。即ち、

I 建国～55年7月：「過渡期の総路線」に基づく「社会主義改造期」

II 55年7月～59年9月：毛沢東の農業集団化提案から、「社会主義の総路線」に基づいて行なわれた「大躍進」の挫折に至る「盲信期」

III 59年9月～65年11月：中国共産党八期九中全会から文革までの「調整期」

IV 65年11月～71年9月：「文革期」

V 71年9月～75年1月：林彪の死から第四期全国人民代表大会までの、「潮流と反潮流の拮抗期」

である。しかし、第二に、私は、75年以降（特に78年の中国共産党三中全会を契機とする鄧小平路線の確立以降）、中国の内政は、もはやこれまでの「穏歩」と「急進」の循環を断ち切り、「開かれた中国」への歴史的国家的要請に支配されながら、非毛沢東化への“point of no return”を越えてしまっているのではないかと考える。

<3> 非毛沢東化と中ソ関係——現代中国の行方と中ソ対立の将来——

では、今後中国は、一体どこに向かうのであろうか。また中ソ関係は、将来どのように展開されるのであろうか。

結論として、私は、さしあたり次のように述べておきたい。即ち、上述したように、今や非毛沢東化への「転換期」を経過しつつある中国は、やがて広い意味でのソ連型社会主義へ回帰・収斂するのではないかと。そして、このような内政上の変化に規定されつつ、外交面でも、80年代半ば頃には、中ソ関係の改善に向けたなんらかの動きがあり得るのではないかと。

このように考える理由は、およそ次の5点である。①党のリーダーシップ（鄧小平、胡耀邦）の体質がアパラーチキーのそれであり、ソ連型と変わらないこと。②現在の中国社会が、「革命的中国の市民社会への妥協」ともいうべき、いわばネップと非スターリン化を重ね合わせたような形で、ソ連モデルに近づいていると思われること。③非毛沢東化により、両共産党間のイデオロギ－的論争点が既に解消していると思われること。④中国共産党六中全会においてソ連に対し肯定的評価がなされたこと。⑤中国外交が、既に幾つかの局面で「ソ連カード」を使い始めていること。

なお、今後中国社会が進み得る道としては、ソ連モデルの他に、「ユーゴ・モデル」と「中国独自のモデル」の可能性も考えられなくはない。しかし、「ユーゴ・モデル」に関しては、デレゲーショ

ン・システムや労働者評議会に代表される社会主義的民主主義が、果たして中国の政治や文化にふさわしいかどうか、疑問である。また、「中国モデル」については、農業集団化（特に農村社会を根本的に変革するうえでその儒教的要素を否定する余り、道教的要素が持っていた「自由放任≪laisser faire≫」まで否定し去ったことの問題性）を、指導者たちが徹底的に見直すならば、あるいはその可能性があるといえるかも知れない。しかし、現在の中国の指導者たちのなかに、そのような方向への摸索を期待することは、極めて難しいといわなければならない。

〔Ⅱ〕 討 論

木戸：①「穏歩」と「急進」の循環が断ち切れた、という現在の中国の捉え方に多少疑問を感じる。「循環」は、10億の民衆に政治の方向を選択させるうえで指導者と民衆とが共有する「リアリズム」として存在してきたのではないか。また、今後中国で毛沢東路線が全面的に復活することはあり得ないにせよ、「精神主義」が全く消えるとも思えない。その点どうか。②中ソ両共産党間のイデオロギー的対立が弱まり、双方とも同じモデルの社会を求めようになるとすると、今度は「民族的対立」が表面に出てくる可能性、つまり中ソ対立がより根深くなる可能性はないのか。私は、中ソの和解は、遠い将来のことのように思うが――。

木村：③木戸氏同様、私も中ソ対立は長期化すると思う。これまで長い時間をかけて西側に接近してきた以上、中国の対ソ再接近は、そこによほどのメリットがない限りあり得ないのではないか。④中国人の領土観について教えてほしい。

中嶋：①「循環」が「中国的リアリズム」として存在してきたことは、中国社会主義の特徴であり、魅力でもあった。しかし、私は、今後の中国はやはり「循環」を断ち切り、「党官僚独裁体制」に向かうと思う。そう考える根拠を次に述べる。(a)文革の悪夢を経た現在の中国の民衆は、もはや「大衆運動」といわれてもついていけないし、将来に対しても疑心暗鬼となり、極めてアパシーな状況に陥っている。そのなかで、これまでの外国嫌いの反動としての「舶来好み」やある種の知的道徳的退廃が既に現われてきている。今後の中国は、やはりこれを引き締める方向に向かうのではないか。(b)「循環」=急激な政策転換を生み出してきた歴史的要因としては、①社会主義建設の速度（テンポ）と結びついた、毛沢東をはじめとする指導者の政策目標と社会的現実との間に矛盾が存在したこと、②毛沢東個人の政治的危機意識、③毛沢東が「非合法」な手段により全党的合意をくつがえすなど、政策決定機構と政策決定プロセスとが余りにも非正常な関係にあったこと、などが考えられる。しかし、今やこれらの諸要因は失なわれつつある（あるいは既に失なわれている）のではないか。例えば、政策決定プロセスについていえば、最近、ようやくにはあるが、その制度化の必要性が指摘されはじめています。

②中ソの「民族的対立」は確かに根深い。しかし、私がここで「中ソ対立」というのは、同じ社会主義国である中ソの対立という一般的な意味においてだ。この限りにおいて私は、既にイデオロギー的論争点が失なわれている以上党レヴェルで、またレーガンの台湾政策の展開次第では外交レヴェルでも、中ソ関係に変化が生じるのではないかと考えているわけだ。そのさい、特に私が重視したいのは、現在の中国共産党指導部が「実権派」によって占められていることだ。③最近の中国には、西側諸国との接近に対し警戒的となるきざしが現われてきている。『人民日報』に、日本からのプラント導入をめぐる「日本人にだまされた」という表現があったこともその一例だ。また、中国は「四つの現代化」を通じて、一人当たりのGNPを今の250ドルから1,000ドルに引き上げようとしているが、西側諸国は全部合わせても、そのために必要な資金の60分の1～65分の1（推定）しか援助・協力できない。つまり、中国は、当面、工業化に向けた苦しい道のりを歩むことになるわけだ。そのなかで、果たしてソ連と激しく対立している余裕があるだろうか。④「寸土といえども争うべし」の言葉どおり、中国人の領土に対する執着心は強い。しかし、その反面、「中国的世界秩序観◀Chinese World Order▶」に抵触しない限り、中国人はあまり領土問題に拘泥しない傾向もある。

望月：修正主義批判を撤回した中国は、理論的な面でソ連に対するメンツを失っている。経済の実績もさほど良くはない。そこで中国としては、今後まず西側に接近し、その高度な技術を導入して、どこかにソ連よりも優れた部面を作り出したうえで、いわばメンツを回復しながらソ連と手を結んでいきたいと考えているのではないか。

中嶋：ひとつのシナリオとして、それは十分考えられる。また、報告では触れなかったが、今後中国が、沿岸諸省に経済特区を設け、ここに華僑資本を導入して工業ベルトをつくり、これをインパクトとして中国全体の工業化を図っていくという可能性も考えられる。日本からのプラント導入などに消極的な陳雲型の「縮少均衡路線」も、鄧小平型の「西側との協力路線」も、「華僑資本の導入」という点では一致し得る。祖国に対する華僑のアイデンティフィケーションも強い。中国が、将来このような方向に進んだ場合、いずれ一定の余裕を持つことができたときに、ソ連との関係も改善しようとするかも知れない。

岩田：中国共産党には、職務上・役職上の序列とは別に党歴による序列がある。その場合、沿岸諸省にいる党歴上3級、4級の党員たちの動き（経済特区設置）に対し、鄧小平のおかげで中央にいる、党歴上は6級、7級の胡耀邦・趙紫陽らが手を出し得ない、という見方はできないか。

中嶋：内蒙古や新疆ウイグル自治区あたりに一種の「独立王国」的な動きが潜在しているのは事実だし、中国の少数民族政策もうまくいっていない。しかし、漢民族には極めて強いソシオロジカルな同化吸収力があり、彼らが統治権を掌握している限り、中国は揺るがないだろう。

岩田：私が尋ねているのは、漢民族内部での動きのことなのだが――。

中嶋：李徳生の東北、許世友の南京もよく「独立王国」ではないかといわれるが、中国共産党の統制力、中央の指導力はやはりあなどりがたい。

山内：漢民族のソシオロジカルな同化吸収力が強いのはなぜか。

中嶋：次のふたつの要因が考えられる。①漢民族が「中国的世界秩序観」という民族的イデオロギーを持つこと。②華僑社会を見てもわかるように、漢民族が、相手を同化吸収しつつも自己保存については極めて排他的であるという特徴を持つこと。

和田：①中ソ対立が和解の方向に向かうという予想には、やはり疑問を感じる。ソ連の場合、なぜ中国と対立するかについて国民を説得する必要はないだろうが、中国の場合、中ソ対立は国民を統治していくうえで必要だったのではないかと思う。その点どうか。②中ソ対立を続けていくことは、両国にとって大きな軍事的負担になると思うが、今後のこの面での展開についてはどうか。

中嶋：①中国共産党のイデオロギーは、民衆全体を把んでいない。もし把んでいれば、かつてその打倒を叫んだアメリカ帝国主義や日本軍国主義と「友好」関係にある今、中国では大変な問題が起きているだろう。中国民衆のなかには、もともと政治に対するニヒリズムがある。従って「中ソ対立」から「中ソ友好」への転換・移行も決して不可能ではない。②中国は、もはやソ連が攻めてくるなどとは本気で考えていない。だからこそ、現在500-600万人といわれる人民解放軍を「300万人体制」にしようとしているわけだ。国防費も年々削減の一途を辿っている。

香川：中国社会主義が今後ソ連モデルに近づいていくという予想に対し、やや疑問を感じる。何らかの形で「中国モデル」の可能性があり得るのではないか。

中嶋：「中国モデル」の可能性は、指導者たちがマルクス＝レーニン主義の公式論から解放され、そのうえで中国農民はどうあるべきかについての理論的摸索を開始しない限り出てこない。今のところ、そのような野心的「実験」を行なえば、毛沢東政治の後遺症の強さに足をすくわれるだろう。ただ、自留地はいま非常に拡大しつつある。人民公社の解体はかなり進むかも知れない。

(文責：木村＝稻掛)

スラブ研究センター研究報告シリーズ No.6

ソ連の隣国関係の 比較研究

昭和56年度文部省特定研究経費

昭和56年度第2回研究報告会（1982年1月29－30日）

札 幌

北海道大学スラブ研究センター

1982

目 次

序 言	伊 東 孝 之.....	1
《ソ連の隣国関係の比較研究》		
チェコスロヴァキアの対ソ政策(1919-1922)		
-E.ベネシュの対ソ認識をめぐって-.....	林 忠 行.....	3
第二次大戦中のソ連=チェコスロヴァキア関係	秋 野 豊.....	9
第二次大戦直後のソ連=朝鮮関係	和 田 春 樹.....	15
1898年アンディジャン蜂起——中央アジアにおけるスーフイズムと民衆運動——		
.....	小 松 久 男.....	21
ソ連邦の現代イスラム —— 社会主義体制における民族的伝統と宗教 ——		
.....	山 内 昌 之.....	26
中国の転換と中ソ関係	中 嶋 嶺 雄.....	32

序 言

スラブ研究センターの恒例の研究報告会は、去る1月29-30日に「ソ連の隣国関係」を共通論題として開かれた。

2日間にわたる熱心な報告と討論をふりかえって、今更ながらソ連という国の博大さ、多様さに驚かされる。国家の物理的規模はある一定の水準を越えると、質的に新しい問題を生み出すように思われる。つまり、それは地球という限られた空間に住む人類に共通の問題をつくり出すのである。これまで人類を一つに結びつける上で大きな役割を果たすと考えられてきたのは、文明とか市場とか交通とかいう眼に見えない非人格的な力であった。しかし、今日われわれはソ連という強大な国家の存在によって、たとえばフィンランド人と朝鮮人という遠く離れた、相互になんの関係もない民族が共通の問題に直面させられるという事実を眼のあたりにしている。ソ連という国が好むと好まざるとに拘わらず人類に共通の問題を突きつけつつある、という認識こそ、今回の研究報告会の最大の収穫ではなからうか。

スラブ研究センターの研究報告会としては今回若干の新機軸を試みたが、それについて反省させられるところがないわけではない。しかし、研究報告会は全体として成功であったように思う。

第一に、今回は比較的若い人々に報告を依頼した。実際に研究をやっている人を、という配慮からではあったが、シンポジウムにはどうかと危惧する声もあった。結果としては充実した報告と討論が得られて、大きな成功であったように思われる。

第二に、報告テーマが歴史、政治に集中した。スラブ研究センターは学際的な研究機関であり、今回の共通論題は経済、文化の領域もカバーしているので、テーマが片より過ぎていくというきらいはあった。しかし、その代りに呼吸のあった質疑応答が得られたように思う。経済・文化の問題は将来の課題として残したい。

第三に、予算の関係もあって参加者が比較的少数にとどまった。この2-3年スラブ研究センターの研究報告会は年々大規模となる傾向があり、平均して40名の参加者を数えていた。ところが、今回の参加者は20数名にとどまった。大きな報告会となると幾つにも部会が分かれて学際的総合研究のメリットが失われる。その点今回ぐらいの規模がスラブ研究センターの報告会としては本来の姿であるといえよう。いずれにせよ大切なのは規模ではなく、内容である。

第四に、共通論題の関係でソ連そのものというよりも、ソ連周辺の問題をとりあげることになった。スラブ研究センターに関係のある人々はやはりソ連研究者が中心であるので、この点不満が残ったかも知れない。

さいごに、これまで研究報告会の要旨はスラブ研究センターのスタッフが手分けして作成していたが、今回は外部の人に依頼することになった。幸い稲掛久雄氏(北大西洋史大学院博士課程)という

有能な人材を得て、従来のものよりもかえって内容の濃い、バランスのとれた報告書が出来上った。これもひとえに稲掛氏の献身的な努力の賜物である。ここに記して心からの謝意を表したい。

今回の研究報告会は、昭和56年度文部省特定研究経費によるプロジェクト「ソ連の隣国関係の比較研究」の一環として行われた。スラブ研究センターの報告シリーズは、われわれの研究報告会の成果を狭いサークルの独占物とするのではなく、広く江湖の利用に供したいという趣旨のもとに刊行されている。本冊子がいささかでも関係者に裨益するところがあれば幸いである。

スラブ研究センター長

伊 東 孝 之

北海道大学スラブ研究センター昭和56年度第2回研究報告会

期日 昭和56年1月29日(金)～30日(土)

「ソ連の隣国関係の比較研究」	
一月二十九日(金)	<p>開 会 式</p> <p>「チェコスロヴァキアの対ソ政策(1919～1922) —E・ベネシュの対ソ認識をめぐって—」 林 忠 行(一 橋 大 学)</p> <p>「第二次大戦中のソ連＝チェコスロヴァキア関係」 秋 野 豊(北 海 道 大 学)</p> <p>「第二次大戦直後のソ連＝朝鮮関係」 和 田 春 樹(東 京 大 学)</p>
一月三十日(土)	<p>「1898年アンディジャン蜂起 —中央アジアにおけるスーフィズムと民衆運動—」 小 松 久 男(東 海 大 学)</p> <p>「ソ連邦の現代イスラム —社会主義体制における民族的伝統と宗教—」 山 内 昌 之(東 洋 文 庫)</p> <p>「中国の転換と中ソ関係」 中 嶋 嶺 雄(東 京 外 国 語 大 学)</p>